

『大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して（二七二）

文・出水 康生

戦国おもしろ百話

三好・織田・豊臣・徳川時代に生きる横田内膳正村詮

阿波岩倉・和泉岸和田・近江水口・駿河駿府・伯耆米子への変転（四）

勝瑞三好城館跡、徳島城跡

阿波の国の中世城郭が他国のものと比較すると小さくてちやちやなものと言われる、と研究家が嘆かれた。高石垣と天守閣に象徴される近世的な城郭は領主の威厳を示すもの、中世的な土塁の山城は守備を目的とするものが多く、戦国期のその地の戦闘の機会、危機感の強弱に比例するかに思われる。

細川、三好氏の時代には阿波から畿内への出陣は再々にされ



勝瑞城跡の見性寺の風景



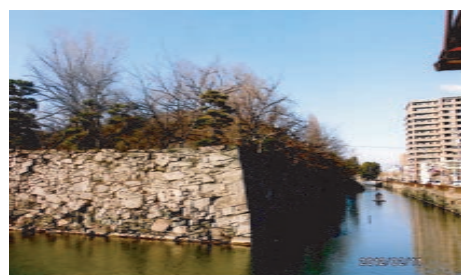
発掘調査中の広大な勝瑞三好城館跡



国の史跡公園形成中の風景



平成2年再建の復元鷲の門と石垣



月見（付見）櫓の立っていた阿波青石の石垣と堀



上桜城の上から岩倉城方面を眺む

たが、攻められる危機感はある

ことが現在にも二〇年来に科学的な発掘調査が進められ、その価値が国史跡と認められて近い将来に国の史跡公園に形成、公開される予定の勝瑞三好城館跡の発掘によって推測される。見性寺再建のための発掘調査までは現在の見性寺の位置に勝瑞城と三好城館と細川守護館が三つ重ねて位置していたと信じられていた。見性寺の位置の勝瑞城が十六世紀末の長宗我部勢の阿

波への侵攻の最後の砦として築かれたものと証明された。それでは細川氏守護所は？、本拠芝生城から京畿・堺との交流の便宜のために築かれたとされる勝瑞三好城館は？と再検討されて、当時の長尾鉄工所の用地が国・県・町の協力で買上げられて発掘調査され、五万平米余の広大な範囲が勝瑞三好城館であると確定されたが、細川氏の守護所の跡は未確定なのである。

三好氏の芝生城、勝瑞城館も城と言うより館の存在であった

勝瑞城館から徳島城へ、勝瑞から徳島への政治の中心が移行することを、悠久の大河の四国三郎吉野川の形成したものとして、中近世移行期から近世、そして

と提唱する。

勝瑞城館から徳島城へ、勝瑞から徳島への政治の中心が移行することを、悠久の大河の四国三郎吉野川の形成したものとして、中近世移行期から近世、そして

中近世移行期から近世、そして

だろうとされる。この四〇〇年来に埋もれて来た城館の発掘、発見は吉野川の水運を最大限に活用する要地に位置する勝瑞と一衣帯水の堺、京畿との交流による阿波細川氏、阿波三好氏の日本史上の存在を再検討、再認識させることになった。

いつもいつも信長・秀吉・家康でもあるまい、信長の直前二〇年の長慶こそ見直されねばならない。阿波・讃岐・淡路（ASAトラリアングル）を本拠として三好長慶を戦国天下人とする戦国三好一族の環大阪湾政権が形成、樹立する三好時代を誇るべき故郷の歴史として再認識しよう。そして「大河ドラマ」を、と提唱する。

勝瑞城館から徳島城へ、勝瑞から徳島への政治の中心が移行することを、悠久の大河の四国三郎吉野川の形成したものとして、中近世移行期から近世、そして

中近世移行期から近世、そして

中近世移行期から近世、そして

中近世移行期から近世、そして

中近世移行期から近世、そして

て近現代の時期区分で、ばやき・嘆きでない新しい視点で再認識されねばならない。500年、450年、400年の昔と今、戦国ロマンを求めている「戦国おもしろ百話」のネタは尽きることがない。広大な空白の勝瑞三好城館跡、阿波の青石で築かれた徳島城の石垣をこれまでの常識を超えて見直してみよう。

五月一日（日）には国史跡に指定以来の十五回目の『勝瑞城館跡まつり』が実行委員会や地元有志の方々が主催・共催・協賛のご尽力、協力によって開催される。三好長慶会が組織する「武者行列」が特別ゲストとして参加し、県内外の同志が共に旗幟高らかにエイッエイッウオーの勝闘を上げる。開会式に続いて「三好実休と千利休」の講演もさせてもらう。

揺れる「天下」の動向

揺れる「天下」の動向

揺れる「天下」の動向

揺れる「天下」の動向

揺れる「天下」の動向

さて「いつもいつも信長・秀吉・家康でもあるまい、信長の直前二〇年の長慶こそ見直されねばならない」とする時代の動きの中に、天文二二（一五五三）年から慶長八（一六〇三）年の五〇年の生涯を横田内膳正村詮が生きる。堺の妙国寺の日珖上人（一五三二～一五九八）に天正元（一五七三）年に帰依して受法し、以後に熱心な「一天四海、皆婦妙法」を実践する法華信徒として生きる。日珖『己行記』に岩倉城主の三好徳太郎と共に「彼岸談義、宝塔品偈頌」を聴聞し、内膳が受法したことが記録される。

横田内膳が二〇歳に受法し、岩倉城から吉野川を下り堺に渡海して「黄金の日々」として繁栄する会合衆による自治都市堺での生活体験を持っていたことが知られる。

天正元年は阿波国内では阿波三好氏の重鎮の篠原長房が細川真之、三好長治に討伐される悲惨な上桜合戦、畿内では三好本



新町谷川を堀とする岩倉城跡と高速徳島道の高架



河岸段丘の城地から岩倉城本丸跡



岩倉城本丸跡から上桜城方面を眺む



長宗我部勢と三好勢との間で謀略、争奪戦が展開された重清城跡

好）存
保が堺
から帰
国して
勝瑞三
好城館
に入り、
織田氏
の威勢

宗家の三好義継が若江城を信長勢に攻城されて十一月に自刃させられる。信長と対立した將軍足利義昭を匿ったことを理由としてのものであった。天文元（一五三二）年に十一・十二歳の若武者として畿内に飛躍して父祖の残した基盤に細川晴元政権の下で苦節十七年で長慶が形成・組織して「天下」を制した三好本宗家が崩壊する。この年には

武田信玄の上洛を信じた松永久秀が石山本願寺の包囲網の天王寺岩から多聞山城に帰城して信長に謀いた。信玄の上洛が実現せず、久秀が多聞山城と不動国行の名刀の献上で赦される。この多聞山城は三好長慶の下命による河内、大和制圧のために信貴山城に続いて永祿四（一五六一）年に築城され、石垣白壁・多聞櫓・四層の天守閣を持つ独創的な城郭であった。信長が翌年に多聞山城に行き、正倉院の蘭奢侈の香木を切り取り、多聞山城は安土山城のモデルとなり

その天守閣は安土山城の小天守に移築された。天正三年四月に三好の名をもって高屋城主であった三好康長が遂に三日月葉茶壺の大名物茶器を献上すること

長宗我部勢の阿波侵攻

信長は信長、秀吉に重用される。

このように天下の時勢が動いている時に、天正三年の秋に阿波南部から、天正五年の春に阿波西部から土佐一国を統一した長宗我部元親勢が阿波に侵攻して来る。先ず海部郡と那賀郡の大半が支配下に置かれ、人質とされていた武田上野介の先導で祖谷山、大歩危・小歩危の難路

七里を越えて三好郡に侵攻し、田尾城（三好市山城町）での攻防の後に白地大西城を居城とする。西讃岐、東伊予への侵攻と共に三好郡から美馬郡の諸城への調略が進められ、重清城の重清豊後守父子が謀殺される。次なる目標とされた岩倉城の三好徳太郎が調略される。天正六年に阿波三好氏の後継者に十河（三

を背に重清城奪還の重清合戦を行い、重清城主となっていた大西頼武が城から脱出したのを追撃して途中で討伐する。その追討の三〇〇の軍勢を率いたのが横田内膳、大島丹波か、とされるが、結果的には援軍の多勢に無勢で重清城は長宗我部勢の支配下に置かれ、その動向で岩倉城の三好徳太郎も調略されて元親の軍門に降った。人質として徳太郎の実子を土佐へ送ったとされるが、実際は大島丹波の嫡男利忠が送られたとされる。

『三好記』の内膳正の記録

『三好記』の「脇之城外軍の事」に記録される。「脇の城をば武田上野介守護し、在住す。三好山城守（康長）は河内国高屋の城を預つて彼地に居住せしに因り、阿波の国の領地、岩倉の城は美馬・三好二郡の旗本たるに

より、嫡子徳太郎守り居らしめ、甥の横田内膳正を添へ、塩田若狭守、父塩田左馬亮入道一閑を加へ置く。入道一閑は三谷の城に居住す。然る処に人々近年三好の恩顧を忘れ土佐方へ与するに因り、各其旨に同じければ、土佐方より番手を加えて脇の城に置きける。然れば三好家へ日頃の宿意を散ぜんため、西林村の三橋丹後守・同常陸守兄弟の侍共から岩倉に相談ありて、天正七年十二月廿六日に森飛驒守

方へ岩倉の城に居住せし三好徳太郎、使者を立てて申しけるは、岩倉は三好家累代の家臣にて候処に、近年土佐方へ降参の仕義如何に候。然れば明廿七日の早天より土佐勢本國へ引取る由風聞候間、御人数を是迄差遣され候はば御味方仕るべく候と憤を含めて申越されければ森飛驒守・三好越後守・矢野駿河守・川村左馬亮、各々尤も至極に同じ、俄に用意して人数を供し廿七日の早天に彼地に赴かける処に方便にて有りけん、」と。この時に脇城外で三好勢の有力武将の多数が謀略で討死にする。

この記録では横田内膳正が長宗我部勢の支配下の岩倉城に在城していたかに推測される。その二年後の天正一〇（一五八二）年に信長の威勢を背に三好康長が本領の阿波に帰国して、長宗我部勢の支配下にあった岩倉城を徳太郎を説得して三好氏の勢力圏に回復したものの六月二日の本能寺の変によって再び岩倉城が長宗我部氏に支配された。その時に「岩倉城落城」として横田内膳正も三好康長と共に畿内へ、と決断したか、と推測される。一時の流浪の後に秀吉によって天正十一年に岸和田城主に任命される中村一氏に仕官し、その妹を妻として新しい人生で活躍する。